

海外
医学雑誌エディターに
聞く
Interviews

Gastroenterology 編集長
Daniel K. Podolsky, M.D.
インタビュー



1897年設立のAmerican Gastroenterological Association (AGA: 米国消化器病学会)は、米国でもっとも古い専門学会の一つであり、また会員数からみても世界最大級の消化器関連の学会である。同学会が発行するGastroenterologyは、消化器病学におけるもっとも権威ある月刊誌に数えられている。AGAとGastroenterology誌に関するより詳しい情報は、インターネットホームページ、www.gastro.org.で入手可能である。

Podolsky博士はハーバード大学医学部卒業後、マサチューセッツ総合病院で研修を修了し、現在は同病院の内科診療部の副部長およびハーバード大学医学部教授をつとめている。さらに、同博士はNational Institutes of HealthやAGAなど、多数の医学関連機関の理事としても活躍している。また、複数の医学雑誌の編集委員もつとめており、日本のThe Journal of Gastroenterologyもその一つである。

同博士より、Gastroenterologyにおける編集現場の考えなどを含め、投稿に関する貴重なご意見をいただいたので以下に紹介する。

投稿原稿の英語のレベル

IG 英語が母国語でない研究者にとって、英語の雑誌に投稿することはかなり大変なことではないかと思いますが？

Dr. Podolsky 私の経験では、英語の表現が査読に耐えられないほど低いレベルであることはまずないといえます。私が当誌の編集に携わって2年になりますが、英語の表現が十分でないという理由で投稿原稿をリジェクトしたことはありません。また、英語の表現の改善を指示して、著者に原稿を返送するような例もごく少数です。

投稿原稿の英語表現は研究内容を評価するのに十分なレベルであり、レビュアの査読にも十分耐えられるものがほとんどです。レビュアには多角的に原稿を評価してもらうよう依頼します。研究内容が興味を引くものであれば、著者に英語表現の改善を依頼しますが、その際には英語表現改善の要点をいくつかあげておきます。

英語表現の点で明らかに不十分で明確でない原稿を採用する際には、私のような編集者の仕事の一つ増えることとなります。しかし通常の場合、私どもは編集の仕事はしますが、原稿の書き直しまではしません。ですから、いかに内容が科学的に優れた原稿でもその内容同様、英語表現も著者自身に改善していただくこととなります。

投稿原稿の質について

IG 米国以外からの投稿原稿の内容についてはいかがでしょう？

Dr. Podolsky 実際のところ、全投稿原稿に対する採択率は20%程度のもので、この率は米国と米国以外の国との間に大きな差はありませんが、国と国の間に差があることも事実です。たとえば、カナダからの原稿の採択率は米国のそれを上回っています。また、ヨーロッパに関しては国により差があるといえます。日本については、平均採択率をかなり下回っています。

日本からの投稿原稿の採択率が低くなる大きな原因は、その内容が編集方針に合わないということです。例えば、画像診断上の非常に限られた技術的問題について述べた原稿を、Gastroenterologyで採用することはありません。

以前は日本の研究者の原稿では、臨床試験の対照群に問題があったり、盲検でなかったり、あるいは臨床試験実施の施設からの承認を得ていなかったりということが指摘されていました。また、これは全般にいえることですが、研究結果の分析を具体的に数字をあげて説明せずに、文章で説明しようとするきらいがあります。そして、最終的な原稿の評価は研究内容が斬新なものであるかどうかです。研

究内容が新しいものか、あるいは以前に発表されたものと同じものに過ぎないのかは重要な点です。私どももこの点を非常に重要視します。

IG 研究計画や原稿の内容を明確にするには、どのようにすればよいでしょう？

Dr. Podolsky 執筆の際、英語を母国語としている人に助言してもらうことをお勧めします。レビュアや編集者が内容の理解に苦しむような文章では、研究の価値も下がるといえるものです。

原稿の構成にあたって、雑誌のガイドラインに十分注意を払うこともまた重要です。Gastroenterologyのガイドラインは執筆する際、非常に有用だと思います。このガイドラインは雑誌にも掲載されていますし、他の色々な方法で入手できます。原稿の構成はきちんとしたものでなければなりません。そして、ガイドラインには原稿の構成に必要な条件が明記されています。

また、投稿する原稿に対する適切なレビューの候補者名もあげていただくと非常に参考になります。ただし、そのリストをそのまま活用するかどうかは保証できません。レビューは研究に対して批判的な人ではなく、その研究分野での真の専門家といえる人が望ましいのです。原稿の内容に関して、適切な判断を下せる人にレビューを依頼することは非常に重要なことです。

原稿が返送されてきたときにどうするか

IG 原稿の書き直しを指示されたときには、どのようにすればよいのでしょうか？

Dr. Podolsky Gastroenterologyには年間2,000前後の投稿がありますが、修正が必要でない原稿というものはありません。まず、編集者やレビューの指示に細心の注意を払って対応してください。この際、レビューが誤解している点について説明を加えて返答するだけでよいこともあります。しかし、こちらの指示を無視しては問題は解決しません。ここでの対応を誤ると、編集者やレビューが問題としている点にできていないという理由で、原稿は再返送されるかリジェクトされてしまいます。

IG つまり、編集者から何らかの指示があった場合は原稿の執筆は続いていると思った方がよいわけですね。

Dr. Podolsky その通りです。ですから、原稿が返却されてもそこで気落ちしてはいけません。ほとんどの著者が、編集

部からの“reject with hope”の手紙を受けとるのでから。私どもは最終的には、“reject with hope”の手紙を出したどの原稿も掲載したいと考えています。しかし、Gastroenterologyでは、なんらかの問題のある原稿をそのまま受理することはありません。また、投稿された原稿の研究の根本に疑問がある場合や、内容がつまらないものであれば、他の点でどれほど整った原稿であっても書き直しなどの指示をすることはありません。ですから、編集部から手紙が来たということは、自分の原稿には見どころがあるのだと思っています。しかし、著者の方々は編集部からの手紙を受けとると“it was not accepted”という箇所のみが目が行って、その後続く“in its current form”という文字は目に入らなくなってしまおうようですね。

IG 問題が実際の実験計画まで及ぶこともありますか？

Dr. Podolsky 私どもでは投稿された原稿の80%をリジェクトしますが、そのうちの2/3前後は実験計画の不備によるもので、残りの約1/3が同様の原稿をすでに受理していたり、内容に新しい知見を見出せない場合や内容に興味がない場合です。ですから、特に臨床試験の場合には、実験を計画した理由や方法についてよく検討した上で投稿することをお勧めします。

